時間とともに成長する地域環境の形成―緑化システムの提案―

（はじめに）

近年、先進的な街づくり、地域づくり方針として「自然と共生」が良く叫ばれ、地球環境の尊さを学び心の豊かさを形成するための方策のひとつとなっている例が多い。福岡においては新しい街づくりを進めているアイランドシティのコンセプトには「照葉のまち」という言葉で自然との共生が謳われている。

これらには地域植生を活用した緑地づくりをとおして、都市環境を形成しようとしているものである。緑地の環境形成機能を効果的にするためには緑地のボリュームを確保することが大きな課題であり、その手法として、もりづくりを目標に実生、苗木からの樹林形成が行われている例がある。一般に緑化は成木を植栽して行われているが、非常に経費がかかることもあり、緑地のボリュームを確保するには不十分な場合が多い。樹林形成の手法は樹木の集団としての活用が効果的な防風林、工場緑化等で活用されているが、この手法は建物外構や街路樹など、個々の樹木の個性が強く反映される緑化においては適当でないと考えられている。現状ではほとんどの都市空間における緑化は緑化材料を他の地域からの成木を導入して植栽するため、その樹木の周囲環境に対する適応力に問題があるため、健全な緑地形成に障害となる可能性が高くなるとともに、環境形成機能を高めるために必要なボリュームのある緑地空間を形成するには、材料の経費等も非常に高くなるものと考えられる。都市の形成は形成された都市基盤をもとに産業活動や、住民の生活を行いながら時間とともに成熟させていくものである。

それらを考慮し、今後の都市空間の緑化のシステムを、樹林形成の活用手法と緑化材料の取得等をとおして地域環境の形成を行う方策を考えてみた。

（課題）

○ 時間をかけて熟成させる快適な都市環境の形成

都市の空間は産業や人口の集中により、ヒートアイランド現象に代表されるように人々の生活環境が損なわれており、その対策として緑の基本計画が策定され、公園緑地、緑道の配置計画が進められ多様な環境形成機能を発揮する緑化を行おうとしている。

しかし、緑化の機能を発揮するためには、緑地内の緑の量の確保が必要であるが、現状では景観形成のみに配慮した個木の配置に重点をおいた計画が進められ、成木を植栽することによる早期の完成を考慮した計画が進められており、緑量の確保の観点が見られない手法となっている。

緑地を構成する樹木は時間とともに生長していくものであることを考慮し、緑地の整備は基本的な整備の後には地域住民の意向を反映しながら樹木の成長を見込んで緑量を増大させ、時間をかけてさらに熟成させていくべきものであると考える。

○他地域からの樹木導入による環境適正と経済性

一般的に植栽される樹木は造園会社が、各々の地域にある樹木園で育成したものを遠距離を運搬して持ち込んだものを植栽する例が多い。福岡の海辺に植栽する樹木を鹿児島の山中から掘り出し育成して、福岡に運ばれた例なども良く見られる。

異なる気候風土の地域から導入された樹木が新しい植栽環境に適応し、健全な状態で生育することはむずかしい。さらに樹木の運搬経費も価格に影響するため、緑化のための費用も大きなものとなる。

緑化樹木は植栽される地域で育成されたものを利用することが有利であるのは当然である。

○実生，苗木から形成する樹林と人との関わり

また、植物社会学に基づく実生、苗木から照葉樹林を形成しようとする試みが工場緑化等で進められ、福岡近辺では北九州の新日本製鉄の工場緑化例などが見られる。この手法は植栽後の管理はほとんど必要がなく、経済的でかつ健全な森が形成されるものとされている。ここではすでに植栽から 20 年を超える年月を経て、「もりづくり」が進行しつつあると思われる。　しかし照葉樹林を代表するシイカシを主体とした景観は黒々とした単調な樹林景観となり、森を構成する個々の樹木は細く、その間隔は狭い。人が森へ侵入することを拒絶したものとなっており、「人」と「森」との関わりが持てない空間となっていると感じられる。

健全な森としての完成には、さらに年月が必要であろうと思われるが、現状では郷土の森、鎮守の森としての親しみは感じられない。将来は植物社会学上の「淘汰」により、不健全な樹木は消滅し、健全な森が形成することになることが想定されているであろうが、現在のこの森を構成する個々の樹木が健全な生育がなされているのかも疑問である。

実生，苗木の活用による緑化の試みが民間会社のイオングループ等でみられるように建物外構の緑化でも行われようとしている中で、このような森では人々から歓迎されないものとなる可能性が高い。

人々に親しまれる健全なもりづくりには、人の健全な関わり（管理）が必要であると考えられる。

（提案）

「里山のもりづくり(樹林形成)」を通した地域環境（空間）の形成

○健全な緑地形成のためには地域の樹木を育成することである。

都市環境の向上のためには、緑化の効用を効果的にするために、緑のボリュームを確保する樹林形成を行い、さらに健全な樹林を育成するための間引き等の管理作業と緑化樹木の育成のための造園的な管理作業を進めて、樹林を地域の緑化材料生産の場としての活用を図る。

①地域の樹木の育成の場としての実生、苗木からの樹林形成

緑化の場として公園、緑道等の公共施設のほかに、水辺、海辺等のオープンスペース、商業施設等の外構などが考えられるが、これらの緑化の際に樹林形成による「もりづくり」のスペースを確保し、実生、苗木を中心とした緑化を進める。

②間引きによる健全な個木の形成からの樹林づくり

樹林は将来の成長を見込み、またより健全な樹林形成のための樹林密度を調整するための間引きを前提として、植栽を行う。

③緑地の造園管理

緑地は樹林形成、樹林管理、供給樹木育成管理等を効率的、経済的に行うために、一括して造園管理者により行う。これは緑地全体の管理経費の削減にも結びつくとともに、樹木供給による収益にもつながるものと考えられる。、

・間引き樹木の育成管理

間引き樹木を地域の緑地形成の場に移植し活用できるように、適当な時期に根回し、枝透かし、剪定等の造園管理作業をおこなう。

・間引き樹木の提供　移植活用

必要な管理をされた間引き予定の樹木は、公園緑地や緑道等の公共の緑地や庭園、屋上緑化等の個人緑地等の造成等、地域の緑地形成に必要な時に、その事業者に提供する。

○地域の人々に親しまれるもりづくり

樹林は照葉樹林を構成する樹木を主体とするが、個々の樹木は大きく、樹木の間隔はゆったりと広く、人々の進入が容易な空間とし、また人々の生活に身近な地域の景観を構成する花木、実のなる木等を積極的に組み込み、多用な樹林景観の形成を行い、里山的な空間とする。

①　人々が散策し、憩える空間の形成

人々は森林浴など、自然環境の中に入ることで、心身を癒される効果を感じ取ることができる。人々の進入が行いやすいように間引きなどとともに、枝落とし、下刈りなどの管理作業も必要である。

②　遊び、学びの空間の形成

多様な構成種を持つ樹林は、多様な野鳥や昆虫等の生息環境として、ビオトープとして位置づけることもできるため、人々の遊びながら学べるレクリエーションの場として機能することもできる。

このような手法により、地域の人々に親しまれる森が形成され、そこで育成された樹木を供給することにより、地域に適応する樹木の活用による健全な緑地形成と収益につながり、さらに樹林を主体とした地域空間形成がより経済的に行われることが可能となる。

（終わりに）

環境共生がさけばれている昨今、地域開発における緑化のシステムとして、緑の効用をできるだけ活用でき、さらにそれを経済的に進めることができる緑化手法として、上記の手法を推進することにより、健全な樹林形成による自然景観と人工的景観の調和、人にやさしい都市環境、美しい都市空間が時間とともに成長し形成されると考えられます。

また間引き樹木から生産された樹木の供給等によって収益確保にもつながり、管理費用と樹木供給による収益とを勘案した管理費用のしくみを工夫すると、今後の緑地維持管理の経費削減に結びつくとともに、造園事業の新しいあり方がここから発生する可能性も考えられる。

多くの地域がこのようなシステムで緑化事業を進めるならば、人々に親しまれる緑地の形成とともに、良好な地域環境形成から、地球環境の保全にも結びつく一方、新しい造園事業の展開への糸口となるとともに、今後の公共事業の大きな課題になる維持管理経費の削減にも寄与することが可能となると考える。

以上